

# 「鬼ノ岩窟」と、鉄と、聖地

富 来 隆

一、はじめに

別府の地名を、明治より以前の古い小字名（「別府市誌」昭和六〇年刊に付載）を見てゆくと、すぐに気がつくのは、鶴と亀という縁起の良い名前である。牛・馬などのほかに、高地には野性動物の名が多く、ことに東山地区には鹿や猿・狐・狸・猪・蛇さらにクラギKuragi（大蛇の朝鮮語）までいる。いまの別府からは想像も出ないような自然優位である。

文化的には、何といってもタタラ・鍛冶の地名とともに、それに関連するものが多く、金山・銅免・鉞地また千疋・白土・水落・登り立・風穴など沢山にある。だから神社もまた多い。

これらのうち、明治一五年の「字小名取調帳」の中で

は、すでに消えているものも多い。近代化のためにか、歴史の移り変りを強く感じさせる。

古くは、「日本書紀」・「豊後風土記」などにより、景行天皇の九州西征の記事をみると、豊前と豊後に、一の共通した「表現の型」があることに気付く。

まず天皇方の先達の武将たち。そして平野部には天皇を奉迎する女性の首長の存在。山間部では反抗する族長たち。日本語で分らないような名前は、朝鮮語を媒介することで始めて理解できること（「史談」前号）。全く同じ「型」だと言ってもよい。

さらに、天皇の進路を辿ると、周防の娑婆ノ津から、豊前の京都郡へ、そこから（宇佐をすぎて）佐賀ノ関へさらに直入の城原へと南に三〇度の天道線にのり、S字状に南下・進軍していることを知る。

いろいろと苦しみながらの発見があった。

「豊」の国とは結局「鍛冶文化の王国」の意となつて、(本誌八号及び「喜寿記念集」) 別府に四ヶ所もの、タラ地名(関連する多くの地名)のある意味も漸くに分かった。永年かかったけれど、やっと結論が出た。

いよいよ最後の大物がのこった。「鬼ノ石窟」古墳である。普通は形から「亀塚」・「亀甲山」などと言つたりする。また地名からの呼び名であつたりする。

それなのに、どうして「鬼」などと言つたのだろう。だが、いつごろ、なぜ? 分らないことばかりである。県内をさがしても、そんなに多くはない。豊前・豊後というから、「豊」の中心の福岡県のほうはどうか。

豊前をふくめて福岡県全体でも、甘木市に「鬼の枕古墳」が一つだけ(それも一九八五年消滅)だと、入江さんが調べて教えてくださった。そうなると、豊後に点々と四・五ヶ所にあるだけということになる。これはどうしたことか、と、改めて考えこまざるを得ない。

もう逃げるわけにはいかないから、とに角あれこれ考えながら、前に進んでみたい。

## 二、「鬼」のはなし

鬼といえは、悪いもの・恐ろしいもの、という感じであるが、そうだと決めてしまつてもよいだろうか。

子供のころ、「鬼ゴッコするもの、寄つといで」誰かの声が聞こえると、近所の子供たちがワーツと家の中から飛び出してくるのが、毎日だった。

鬼ゴッコ遊びは、遊びであつて、「恐ろしいもの・悪い者」などと考えたこともなかった。昭和のはじめで、小学一年のときの私たちの国語読本では、一番終わりに「モモタロウの鬼が島征伐」がのつていたが、家来にはイヌ・サル・キジをつれてゆくのみだから、子供心にも、これは作り話だと思つていたから、鬼も作り話であり、それだけのことだった。

鬼が悪いやつだ、というのは、二月の節分の豆まきのとき、父親が豆をもって、「福は内、鬼は外」といつて豆をなげるのを拾つて、自分の年の数だけ食べることでつた。福も鬼も、目には見えないが、鬼は悪いやつだという位は教わつたことだろうが、覚えていない。

中学のとき、満州事変が始まり、だんだん軍事情色が強くなり、教練の時間が厳しくなっていた。

だが、本場に「桃太郎」のことが強く印象にのこっているのは、熊本の高高に入った年の夏のことである。

友人が岡山の高高に入って、それが夏休みに、九段上の私の家に遊びにきて、六高ダンスを踊ってみせたのである。五高の「武夫原頭」と全く同じようなものであるが、座敷のまんなかでのごとで、それが桃太郎ダンスだったから、たいへん印象的で、今でも目に見えるようである。その一節を、左に記してみる。

むうかし、むうかし、そのむかし

おいさんと、ばあさんが、あつたとき

ヨイヤサ、キタサ

おいさんは、やあまへ、しばかりに、

ばあさんは、かあわへ、せんたくに、

ヨイヤサ、キタサ

どんぶりこ、どんぶりこ、ながれくる、

モモをば、ばあさん、ひろいあげ、

ヨイヤサ、キタサ

おうちへ、帰えって、真つぶたつ

なかから、でたのが。このわたし

ヨイヤサ、キタサ

成人、長じて、オニが島

征伐、せんとして、家をでる、

ヨイヤサ、キタサ

(中略)

赤鬼、青鬼、まだら鬼

まえから、くるやっあ、拝みうち

ヨイヤサ、キタサ

あとから、くるやっあ、背負い投げ

うっかりして、立ってるやっあ、ぶんなぐって

七ゆすり

ヨイヤサ、キタサ

さすがに六高は吉備の国、桃太郎の本場ではある。

ところで、桃太郎の研究といえ、私たちがとつての民俗学界の大御所、柳田国男翁の「桃太郎の誕生」を、昭和一七年(三省堂)に入手した。むさぼるように読んで、母親から「すっかり子供にかえたようね」と冷やかされたりした。これは鬼ではなくて、「小サ子物語」

の本であった。大学生のときである。「鬼畜米英」との戦争の真っ最中だったから、柳田学にとりつかれた。

戦後になって求めたのは、文化人類学の泰斗、石田英一郎『桃太郎の母』（昭和四一 講談社）である。社会学の講義を担当してただけに、「文化人類学」という宣伝に興味をひかれた。内容には、「月と不死—沖繩研究—」とか、「天馬の道—中国古代文化—」などと共に収められた『桃太郎の母』も母子神信仰としての「小サ子神」である。柳田翁も、こちらにも「鬼」のことは問題とされていない。

その後、昭和五八年、NHKブックスの一冊として、『桃太郎の運命』が鳥越信氏によって、歴史的な児童文学の流れ（民話のあり方）を数多く紹介され、時代とともに移りかわる様子にもすっきり驚かされた。その中でも面白かったのは森桂園の「鬼ガ島」だった。

「桃を拾いあげたおばあさんは、家に持ち帰って、おじさんと共に食べると、二人はぐんぐん若がえって、おばあさんはやがて身重になり、三年目に男の子を産んで、桃太郎と名付けた」云々。あゝ、ビックリした。

鬼のことでは芥川竜之助の小説「桃太郎」が面白いが、これは小説である。「鬼」の研究の本もあるが、本稿の眼目とも合わないようだ。だから、やはり、その方の角度から調べねばなるまい。

三、「鬼」という語について

今手許にあるのは、若尾五雄『鬼伝説の研究 金工史の視点から』。これは役に立ちそうだ。ほかには、大和岩雄『鬼と天皇』、邦光史郎『鬼の伝説』があり、それに道教の研究家福永光司（中津市出身）の『馬の文化と、船の文化』（平成八・三刊）の中で取り上げられている。これだけ有れば大丈夫だろう。

まず順序から言って、「鬼」という言葉の意味から始めなければならぬが、その手始めに『大辞典』と『学研漢和大辞典』からひいてみる。

【大辞典】

鬼 (漢) キ オニ、タマ、タマシヒ、死ンダ霊

キ 幽魂、バケモノ

(呉) サトシ、ラセツ、夜叉

(和義) オニ、借金取り、

猛勇、無慈悲、異形等ヲ現ワス語

〔語義・字源〕 人ノ死シテナルモノ

死者ノ靈魂

① 鬼ノ義ヲトル字

魂、魄、魍等、鬼部ニ属スル大部ノ字

② 鬼ノ音符字

愧、魄、媿、媿、傀、塊、塊、塊、隗、

鬼、魁、媿、媿、魏等

〔学研漢和大字典〕

鬼 キ

〔意味〕 ① おに、死人のおぼけ、亡霊

▽中国では、魂が体を離れてさまようと考え

三国・六朝以降には、泰山の地下に鬼の世

界がある(冥界)と信じられた。

幽鬼、厲鬼(わるい鬼)

② (仏) イ地獄で死者を扱うものや死人たち

ロ人力以上の力をもち、人間を害す

るもの

③ (名) 飢餓に苦しむ亡者(餓鬼)

④ (名) いやな人、ずば抜けているがいやら

しい人。債鬼(借金取り)、鬼蜮(陰険な

人)

⑤ (形・名) あの世の。死後の世界の。転じ

て人の住まない異様な所(鬼籍、鬼録)

⑥ (形) 人間のわざとは思えない。並はずれ

て優れた。(鬼工、鬼才)

〔国〕 おに

① その道に一生かけた人。(芸道の鬼)

② 鬼のようにむごい。(鬼婆、鬼夫婦)

③ 鬼のように強い。(鬼將軍)

④ 並はずれて大きい。普通と違ったおかしな

(鬼ゆり、鬼やんま)

『大字典』と『漢和大字典』によると、「鬼」というのは、だいたい死者の霊であり（鬼籍に入るといふ）特別の古墳を造られているのだから、その中でも「並はずれてすぐれた」とか「鬼のように強い」というような土地の支配者を意味したときには間違いない。それに「日出町から移った次期の新しい古墳」（『別府市誌』）であるだけに、別府にとって初代の王者ということになり、それだけにまた「恐ろしい」支配者だった。

とは言っても、なんの伝説も聞かないから、それが、いつごろ『鬼』と名付けたのかは分かりようがない。

延岡から高千穂線に乗って、町に行ったとき、大きな古墳があり、こんもりと木々が茂っていたのを見て、その土地の人に聞いたら「あのお山に上ってはいけませんよ。出て来た人は居ないんですよ」と言われた。「腹がせく」位のことはよく聞くが、この言葉には驚いたが、その後、あちこちで同じ言葉を聞くようになった。大分川東岸の下郡から長谷（ナガタニ）には「あの森には大蛇が住んでいて、入ったら出られないというよ」と聞かされたが、今日ではきれいに街になってしまった。

「鬼ノ石窟」には伝説はないが、最初の強大な支配者だっただけに、案外に古い呼び名かもしれない。

いろいろ考えても分らないから、も一度出直そう。

『大字典』の終りの「鬼の音符字」のなかに、終りに「魏」というのがあった。魏志倭人伝を思い出した。

魏は、委に鬼であり、倭は人に委である。委（女が稲をつくる意）を共有して、一は鬼、一は人である。これはどうしたものかと、自分なりの発見に面白がったり、考え込んだりした。

『三國志』の「魏志東夷伝」はあまりにも有名であるが、念のために「鬼」をみってみる。

夫餘、殷の正月を以て天を祭る

高句麗、大屋を立て、鬼神を祭る

十月を以て、天を祭る

濊、十月の節を以て天を祭る。

馬韓、五月を以て種を下しおわり、鬼神を祭る。

鬼神を信じ、国邑に各一人を立て、天神を祭ることをつかさどらしむ。鬼神に事ぶ。

辰韓、(なし)

弁韓、鬼神を祠祭する。

倭人、(卑弥呼) 鬼道を事とし、能く衆を惑わす。

右は白川静『中国古代の文化』から孫引きしたが、

「鬼神」とか「鬼道」とかになると、最も新しい書とし

て福永光司『馬の文化と船の文化』が、入手しやすくも

あり、いろいろと説明がある。「鬼神の祭り、人鬼」

「鬼道について」また「神と鬼」「魂と魄」などなど。

それにしても『古事記』にはない「鬼」が、『日本書

紀』にはどうして出てくるのか。それはとも角、こうな

ると「鬼」という語はずい分と古くからあり、地方にひ

ろがり、いよいよ伝説化したりもする。「一ツ目の鬼」

となれば、「一ツ目の竜神」とはもう似たようなことに

もなる。(神々にも多い)。

そうして「一ツ目・一本足」の巨人となれば、当地に

は「百合若大臣」の物語り(本拠地は大分市)さえ生まれ

てくる。九六位山籠にも同様な伝承がある。

こうなると、卑弥呼の「鬼道」シャマニズムから離れ

て、俗世界の「鍛冶文化」に近づいてくる。

#### 四、鬼のつく古墳と鉄文化

「鬼」とつく古墳は、豊前にはないことが分かった。

(入江氏の御教示)。あと、豊後について、左の四書を

利用した。

角川書店刊『大分県地名大辞典』

OBS大分放送『大分歴史大事典』

平凡社刊『日本歴史地名大系四五・大分』

保育社、橘昌信『日本の古代遺跡四九・大分』

右によって、北の方から写すと、次のようになる。

名称 場所 遺物 装飾

鬼塚 国見町の丘陵北端 省略 線刻画

鬼ガ城 玖珠町(旧森町東) " 線刻画

鬼塚 玖珠町小田 " 彩色

秋葉鬼塚 三重町秋葉 " 彩色

鬼の石窟 別府市上人町 " 彩色線刻画

ただこのほかに大分市丹生の佐野神社うらに雄塚雌塚

とよばれる小円丘が二つ並んでいるが、これは前方後円墳の崩れ残りであるらしく、昔は「鬼塚」とよばれていたものようである。大学で内野先生の実地指導で野間古墳群十余を測量したとき、それらが、この方向に一致したから、おそらく丹生川中流の中心古墳だったと思う。当らずと雖も遠からず、だろう。

ところで、装飾をもつたり、遺物にめぐまれた古墳は他に多くある（前記、橋氏著『大分の遺跡』など）が、此所には、「鬼」の付くものに限った。装飾の多いことが遺物と共に、将来、考古学的な解決につながるかも知れないが、それは専門の学者にゆずりたい。

ここでは、右のような位置に、点々と「鬼」の古墳が存在する事の意味（どうして、誰が、いつ頃かは分からないけれども）を、何とか考えてみたい欲望にかり立てられるのである。

別府の地には、「鬼ノ石窟」（古墳）のほかに、そこから西の山手に「鬼山」（鬼山地獄あり）がある。南の東山には志高湖があり、西の迫を「鬼ガ迫」とよんでいる。とすると、そのとなりの城島（きじま）も、あるい

は「鬼島」が元だったかも知れないと思える。というのは「桃太郎」が征伐した「鬼ガ島」というのが、岡山から対岸の四国・高松の入口近い「女木島」（めきじま）だったといわれるからである。木・紀・城・鬼、これらすべての「キ」は自由に移動するからである。とに角、別府に三ヶ所も「鬼」があるのは凄い。

一つの例として、古墳ではないが、国見町に「鬼ノ岩屋」・「鬼ガ城」と呼ばれる所がある。じつは名刀工の紀ノ行平、彼は紀ノ新大夫行平とよばれ、それがあまりの名刀工ゆえに、名前をもじって鬼神大夫と呼ばれた。その鍛冶の場を、世人称して「鬼ノ岩屋」・「鬼ガ城」と云ったとのことである。（『香々地町史』）

この鬼神大夫、のちに次第に国東半島から別府を南下し、ついに大分市上野丘の東端の「岩屋」に入り、さらに東して鶴崎の奥の「二目川」（ふためがわ）に住んで豊後高田鍛冶の祖と伝えられている。

鍛冶の業は、他人に見られることを嫌った。特殊な技であるだけに、その秘術を盗られないようにしたのだ。ふつうの人達からみれば、粉砂鉄を燃やしているのか、

と思つてゐると、色々な金工物が出てくる。「火」を扱  
うのも恐ろしい。「地獄の図は、鍛冶屋から展開したも  
のだ」と云われる。

タタラ・カジの業は、「砂鉄七里に、炭三里」といわ  
れるが、これは材料をはこぶ距離であるし、炭というの  
は木炭だから、森林のある所ということになる。とする  
と、だいたい三里ぐらいの所を移動していった、と考  
えて良いだろう。

紀ノ行平は、始めに竹田津の鬼籠（キゴ）に鍛冶場を  
作った。森の下に井戸水あり。ここから野田に、最後に  
鬼ガ城に移った。黒木山の山腹で自然の石窟。石清水が  
わき、その上方に鍛冶場、多々良、金敷などがある。

紀ノ行平、すなわち鬼神大夫とよばれたようなカジヤ  
の居るところに、「鬼」の伝説が付いて動いた、と仮定  
しよう。

そうすると、香々地（カガは Kwang 鉦の音写）は、  
古く神武天皇の故事の「天ノ香具山」のカグとも同じ意  
味である。そして伊美には「赤根」（赤は銅・水銀朱）  
がある。そして鬼神大夫が居る。

伊美の北端の古墳から、「鬼塚」と呼ばれるようになったのは、左様いう因縁から、後人の名付けたものではな  
いのだろうか。

「鬼」と「鉄」↓「鬼塚」の誕生。すこし単純すぎる  
かも知れないが、とも角、第一の出发点として、こうい  
う仮説を立ててみたい。

先に記した「鬼」の付く古墳のうち、これに都合の良  
い所はないものだろうか？ 有る、ある。

そうだ、三重町の秋葉鬼塚は、右の想定にピッタリの  
古墳だと云えよう。すこしく記してみたい。

秋葉の南・上の方が内山観音で、炭焼小五郎の墓もあ  
る。炭焼きとは「鑄物師」のことである。タタラ師とい  
ても良い。柳田国男の名著もあり、小五郎の名は全国に  
渉り歩いていて、名古屋では「芋焼きよかろう」になっ  
ているというオトギ噺に似た話もある程である。

この内山観音をさらに上ると、すぐ次ぎが「三重鉄山」  
で、三米程の白い標柱が立っていた。「鉄山」があるこ  
とは、あまり学会に知られていない。もう一つ。今度は  
内山のすぐ下（北）の崖から「ヒスキ」がとれる、と地

質学の先生に教わった。鉄山があり、ヒスキがあり、炭焼小五郎の本拠地である。すこしはなれて「玉田」の里の地名もある。そして、古墳の名を「鬼塚」と呼ぶのだということになれば、鬼と鉄との同居のモハン例のようなものとなるう(後述)。

もう一つ例をあげよう。いま大分市であるが、以前は海部郡だった「丹生」の地の例である。佐野の丹生神社(二ノ宮)のすぐ後が「鬼塚」だったらしい。丹生川は九六位山から流れ出る。その源に見事な「水銀朱」がとれる。それが有名すぎて他が忘れられているが、銅もあるし、少量だがヒスキもある。沿岸は九十九塚で知られる野間古墳群の付近は弥生・縄文・先縄文(ホルンヘルスが主)、さらに旧石器で知られる。特色ある石英斑岩と真白な石英岩が、凝灰岩や珪岩などに混じって六七割を占める。それ迄の開墾で拾った弥生土器にホルンヘルスが入っていたので、昭和三十七年二月六日(旧正月二日墓参の折り)此処に石器ひろいに出かけたのが、丹生旧石器の始まりであった。故里とは云え、特別に印象がつよい。近くに、青銅器出土も四ヶ所あり、古代の聖地!

「丹朱」と「銅」と「ヒスキ」。それに海岸から大野川岸にかけて、小佐井・大在・川添の地(ソイは Soil 砂鉄のこと)である。炭焼小五郎のお姫さまが、南から九六位山系の姫岳を越え、丹生川から大在に出て船出した話も有名である。やはり、朱とヒスキと鉄にまつわる伝説であろう。「鬼塚」の名も、これら金工の業と結びつくと考えると、三重の秋葉鬼塚(鉄とヒスキ)より以上に好例だろう。

玖珠では、弥生・古墳群で有名な「千人塚」があり(今自衛隊)、田の畝からはよく石包丁をすててあるのが拾えた。千人塚からは「鉄銚」も出ているし。角埋山(ツノムレ)からは銅銚も出ている(今近畿の大学博物館にある)。これらが、「鬼」の付く理由となったのだろうか。あとで、もう一度ふれてみたい。

さて、鉄(タタラ・カジ)と鬼とがむすびついているということは分かったが、だからといって、タタラ・カジのあるところ全部に「鬼塚」の名がついているわけでもない。ことに豊前から宇佐の方に、その名が無いことがどうも気にかかる。クボテ山に鬼神社があるが、これ

は修験のほうであるから、こちらからも考えてみなくてはならないだろう。「塚」はなくても「鬼」が居ることは大変なことだ。ことに国東には六郷満山とよばれる多くの寺院があり、「修正鬼会」(東・西とある)はことに知られている。この鬼はどんなものか。

##### 五、修験道と、天道信仰と、

写真に掲げたのは屋山・長安寺の修正鬼会の面と、新発見された中国・揚子江上流の、昔の蜀(しよく)の初代王国の青銅製の面とである。殷代後半のころのものでされる。中国文化といえれば北方



上 長安寺鬼面

下 中国古代鬼面



(黄河)の文化とばかり思われていたのに、中国南部にこんなに進んだ文化があったという新発見で、歴史がかわるのではないかとさえ云われている。(七月一日、朝日新聞)

場所は遠くはなれ、時間も永くはなれているのに拘わらず、この二つの顔の面は、何とよく似ていることだろうか。

これを、どう考えたら良いのだろうか。中国の歴史が書きかえられる程のものだというだけに、たゞたゞ驚くばかりである。

修正会の鬼は、善鬼であり、火鬼であり、鍛冶(金工業)の代表者のようでもある。八幡神は

「鍛冶ノ翁として現われた」と託宣集にあり、また熊野明神も「鑄物師の神」だということが『神道集』（平凡社、東洋文庫所収）にみえている。

例の武蔵坊弁慶の背中に背負っている七ツ道具が鍛冶（金工）に関係するとは、もはや周知のところ。

以前、国東の成仏寺の鬼会に、栗林定さんの案内で、家内とともに出かけたことを思い出す。見てよかった。

宇佐八幡の博物館長中野幡能氏や、最近中津に帰郷された福永光司氏らにより、八幡大神のこと、道教のことの説明がなされている。若尾五雄氏の『鬼伝説の研究』は金工史との関係を記されている。

宇佐八幡宮に奉呈する神鏡を鑄造することで知られる香原岳は「一名、鬼ガ城と云ふ。ウサ八幡の社家としても重要な辛島一族の発祥地である。つまりシャマニズムである。」鬼と金工（採鉱・冶金・鍛冶）の関係を示している。前おきは、この位にしておこう。

宇佐を中心にして国東半島に花を開いた六郷満山文化を、その「分布」を地図上に示すと、御許山・雲ガ岳を接点として、その東に、本山・中山・末山の順に小円・

中円・大円がうまく画かれることは、前に何度も図示したことである。そして、その中に天道信仰の線が見事に引かれることも明らかになった（大分大・教育『国東半島』所収、また古稀記念集などにも再収した。）

今日の問題に関して云えば、雲ガ岳から東北三〇度（夏至の日ノ出線）の線をひくと、本山本寺の西叡山をすぎ、富貴寺を通過して、両子寺を過ぎる。この寺は、わざわざこの天道線上まで両子山から南に下って造られている。（両子山は御許山から東北三〇度の線上にある）

両子寺からさらに富来の大恩寺をすぎて、鳴（ナル・Nar 〈日〉の音写）と日向に至る。ともに丹がある。

西叡山の東には、すぐ近くに元宮磨崖仏があり、東南三〇度には真木大堂が建てられている。これだけで、もう天道線のこと、十分であろう。

末山本寺の屋山・長安寺から真南に線を引くと、雲ガ岳から東南三〇度（冬至）の線とぶつかる所に、満山最後の赤松・願成就寺がある。見事な天道信仰線である。

ここで、別府の「鬼ノ石屋」にもどろう。小字名図で分るように、鬼ノ石窟の付近には、鉄輪の

(野田境に) タタラから下りてきて、宇土山から梶屋・井手添、そして水落がすぐ近くにある。

梶屋の南に「ウカリ」(もと怒・イカリ、これは鑄銅のこと)もある。

また古墳のすぐ近くに、銅面(銅免)もある。

別の伝説ではあるが、浜脇と同じように隠迫の地名もある。このように銅鉄の文化地名には事欠かない。

さらに春木川をこして南には、山ノ神、千疋、千疋前、千疋浦、土穴などがあるが、これは新しいものかもしれない。やはり鉄輪をカンナバ(鉄砂場)からの転として古いものだと考えたい。(『史談』第六号)。

たしかに、「鬼」と金工(銅・鉄)との関係がありそうだと説明はされるが、どうもスッキリしない。これは「鬼ノ石窟」古墳が、別府での最初の古墳として、別府地方の中心的支配者としての「鬼」のイメージが強いからである。書紀では「速津媛」という姫様なのに。

ここでやはり天道信仰のことが気にかかるのである。

鬼の石窟が「天道信仰」において、どういう位置を占めるものになるか、思い切って天道線をひいてみることにする。

にする。

二〇万分の一、それに五万分の一を数枚つないだものを用意した。

まず目につくのは、別府の象徴ともいえるべき鶴見岳(一三七四、五m)。そしてこの鶴見岳の山頂から東北三〇度(夏至の日の出線)が、まさしく此の「鬼ノ石窟」となる。

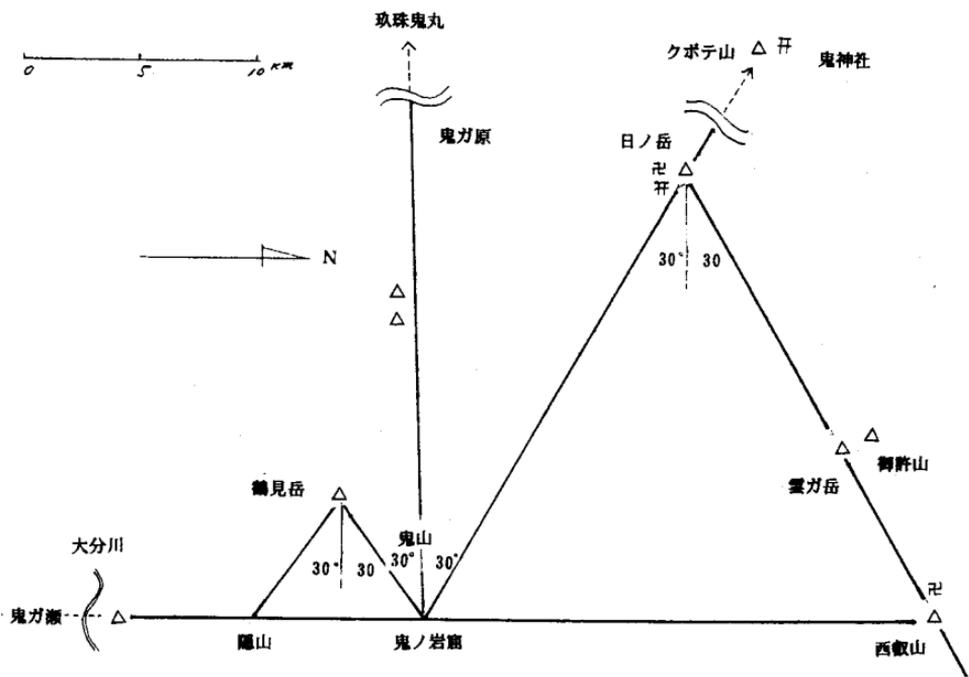
そして鶴見岳の東南三〇度(冬至)の線は浜脇の「隠山」(となりがタタラ)の山峡にとどく。

試みに鬼ノ石窟と、此の隠山の山峡を結ぶとマッスグ南北になる。(正三角形ができた)。これは面白いことになった。だから今度は、「鬼ノ石窟」を中心にして、各種の線をひてみることにした。

図をみていただきたい。すごいことになった。

鬼ノ石窟からの南北線を延長すると、北は六郷満山の本山本寺たる西叡山なのである。それだけでなく、南に線をのぼすと鳥越峠をこえて、さらに南下すると大分川の北岸の「鬼ガ瀬」になる。また鬼が出た。

鬼ノ石窟から西北に三〇度の線をのぼすと、十文字原



の猫ガ岩山、宇佐郡に入って院内の日ノ岳にとどく（西方寺あり）。（となりに熊野がある。）

この日ノ岳はすごいところ。ずっと西北三〇度にはクボテ山（ここに鬼神社あり）。そして日ノ岳から東北に三〇度には雲ガ岳にとどく。だからその先は西叡山にとどくことになる。

鬼ノ石窟と西叡山と、日ノ岳との線も大きな正三角形を作ることになった。クボテ山まで巻きこんだ。

若尾氏によると、求菩提山に鬼神社あり、犬ヶ岳に向って建てられているが、ここには金鉱があり（黄金が掘られた伝説あり）、また求菩提山麓にはタタラの地名もあって、鬼と金工の関係をよく示している、と言う。

地図を見ると、求菩提から流れ出す川（東北流）が、佐井川である。サイとは朝鮮語で砂鉄のこと。川を少し下ると、岩屋と大河内がある。この岩屋の天井には、すばらしい極彩色の、天女の舞う姿が画かれている。ぜひ一見をすすめたい。その下の大河内は、老輩には懐かしい大河内伝次郎の生地である。さらに下ると、左岸に才尾（サイノヲ）と鬼木（オニキ）の部落があり、此所に

も鬼と鉄との関係を示している。

もう一度、天道線にもどろう。最後に鬼ノ石窟から、正東西線をひいてみる。西のすぐ近くに「鬼山」があり、温泉がある。ずっと線をのばすと、塚原温泉の北を通って、日出生台演習場のまん中に「鬼ヶ原」の地をすぎ、さらに西すると旧森町の北、角埋山（ここから銅矛が数本、出土している）の東北に「鬼丸」の地にとどく。この辺でやめよう。鬼丸の南には「鬼ヶ城古墳」があるが、これは、その西の「天道聖地」の東に当る。

玖珠の「天道山」は、英彦山をはさんで両側にある「天道」の一つ（西側はホナミ天道）である。

この天道の聖地から、南に玖珠川を渡って、小田の地に「鬼塚」があり、天道から東には千人塚あり（いま自衛隊駐屯地）、かつて鉄矛などが出土している。千人塚をすぎてさらに東すると「鬼ヶ城古墳」につき当る。

（「玖珠郡史」による）

こうして「鬼ノ石窟」鬼と名の付くものも、ただただ恐ろしいモノと云うだけでなく、先祖の墓地であり、タタラほかの金工との関係も密なるものあり、そのうえ

「天道」聖地として、一の「聖なるもの」への昇化さえ見えるのではないか！

天道信仰が早くから存していたことは云えるだろう。だが、やはり、誰が、いつ頃、「鬼」という名を、どうして、あちこちに付けたのだろうか。こればかりは、どうにも分からない。やんぬるかな。

ただ、どうやら分りかけた「聖地化」の問題についてこれが案外な手がかりを得ることになるかも、そう思つて以下、もう少し筆をすすめてみたい。

#### 六、聖なる空間と時間

太陽崇拜を、天道信仰として、さらに「天道線」の存在として理解することで、それまで不思議だ不思議だと思つてきたことが、あるところ迄は疑問がとけた。

「日の神」の子孫である天皇、第一代の神武天皇が、セト内海を東征して、近畿地方で、長髓彦（登美彦）に向つて勝たないのは「日ノ御子」である天皇が、東に向つて攻めるからだ、と云つて南に熊野から回つて北上し、

東から登美彦を攻め亡した話は、太陽を背にして攻めることが「日の御子」のこと、天道線を吾がモノとする事を意味している、と解すべきである。

景行天皇の西征が周防の娑婆ノ津から豊前の京都郡へ、さらに速吸ノ門へ、さらに直入郡木原へとの進軍は、三〇度、三〇度、三〇度の線をS字状に進むことで、はっきりと天道線上を進軍したことを示している。

初めて天道信仰線のことを記したときは「偶然だよ」と云われもしたり、笑われもした。しかし、今は違ふ。

補助線一本の引き方で問題が解ける幾何学を笑う人は居ないだろう。だから、「又線引きかい、線引き」と冷やかされても、「万引きではありませんよ」と笑って答えられるようになり、かえってファイトがわいた。

今回もまた、線引きをつづけたが、それによって解決できた面と、できない面とが、はっきりとした。

ここで、「鬼の石窟」が天道地でもないのに聖地として理解され得るのか。つきつきと問題が起ってくる。

まず対馬の「天童信仰」（天童聖地）のことがある。

北九州では、英彦山（ヒコ、日子）の東と西に二ヶ所の

「天道」地名がある。玖珠川の北に「天道山」あり、英彦山の西北にホナミ天道がある。また国東六郷満山の本寺たる屋山長安寺の「太郎天像」は正確には太郎天童像であって、天童＝天道なのである。

そのほか英彦山（ヒコ）などのように日子を示すほか日向（ヒウガ）日平（ヒビラ）など、日のつく地名。

また朝鮮語の「日」の音写である鳴・奈留の地名。

背振山や祖母山（古くは添利岳、ソウリ）のように朝鮮語の「所夫里」（ソウル）の音写の霊山などなど。

これらが一ツ一ツ、ポツンポツンと点在するのでなく太陽崇拜の天道線を考えることによって、それらが互いに結びついて、また神社や寺院がその線上に建てられていることを発見できたりする。

天道聖地や、聖なる神社・寺院などが、互いに結びあい、そのことによってさらなる聖の空間を作り出す、ということが考えられるのではないのか。

歴史的伝統の強い日本である。それだけに、聖地もまた永い伝統的な聖地化するのである。

日本だけではない。宗教というものは「聖」信仰であ

り、世界的なものである。ここでは、今問題としてゐるものと関連して、フランスの宗敎社会学者のミルチャ・エリアーデの説明にかりて、「聖なる空間と時間」を少しく述べてみたい。

第一に、「聖なる空間」について。

どのような力の顕現（クラフトファニー）もどんな聖の顕現（ヒエロファニー）も、ともにそれが顕現した場を変容させてしまうような、すなはち、それまでは俗的な空間だったものが、聖なる空間に昇格するのである。（日本での古墳や石塔、神社など）

周囲の俗的空間から、それを隔絶させることによって聖別化した原初の聖地を、くり返し永続させるのである。この連続性が、聖なる空間の永遠性の理由を説明づけるのである。

第二に、「聖なる時間」の不均衡性について。

エリアーデは例として、ダヤク族において、一日に、五つの時が区別されているのを示す。日の出、午前九時ごろ、正午、午後三時、夕暮れ、である。

「聖なる」時間は、それに前後する「俗的」時間とは

どの点において相違するか、という問題である。

いま日本で利用している六曜表を考えてみよう。

先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口、

まあ似たようなものであり、だいたい理解できる。

最後に、第三として、「象徴の構造」について。

この「聖」なるものを「象徴的に示す石」によって、説明と、

ある種の「石」が「聖なるもの」となるのは、死者の「先祖」の魂が、そこに宿るからである。この石が、神聖さ・聖なる力を顕現するからである。

ここにみる「鬼の石窟古墳」や家々の「墓石」などもこれである。聖地となるのである。

もう一つある。

そのほかに、間接的なヒエロファニーによって、つまり、石に呪術的な宗敎的な価値を賦与することである。

もちろん「金（キン）」は、世界私的に「貴石」であるが、そのほかにも例えば、翡翠（ひすい）は、古代中国のシンボルズムにおいて重要な役割をはたした「貴石」である。社会的次元では、ヒスイは王権と武力を具現し、

医療の面では不老・不死の薬だと、道教信者は信じていた。金もヒスイも、陽の面をあらわす。

日本の神器の一つ、ヒスイの勾玉はこれではないか。つぎに先史インドでは、「真珠」が万能薬となる。ヨーロッパに伝わり、真珠は女性的・陰の面をもつシンボリズムだとされる。

多くの地方で、「貴石」は蛇か竜の頭から落ちてきたものだと信ぜられていた。あらゆる性質の財宝（大海の底の真珠、地中の金など）は、竜によって守られているのだ。

大学の東洋史で、「メコン川の底に、竜が金の玉を守っている。帝王の位につく資格のある王子でないと、これを渡さない」と教わったことを想い出す。そうだとすると、長崎オクンチの祭りに、金の珠を竜が追いかけてまわるのは、その本当の意味は、竜が金の珠（王位の象徴）を守って動いているのを示していることになる。

（山本達郎『即位式と沐浴と龍 東南アジアの伝承』  
平六・二 「日本学士院紀要」）

象徴とは、こういうものを云うに他ならない。

## 七、むすび

別府の「鬼ノ石窟」が、もちろん先祖を祭る石として聖化されたことは分った。先祖の魂が宿る「聖なる石」として神聖視されることとなったのである。

さらに、前章でみたように、鶴見岳から東北三〇度の「日の出」の線（夏至）と、求善岳から日ノ岳を通過の、東南三〇度の「日の出」の線（冬至）という、二つの天道線の交点の位置を占めること。さらに南北に、また西に天道線をひくと「鬼」の名の付く地名が次々と存していると。これもまた「聖地化」の一つのあらわれではなからうか。

それにしても「鬼の石窟」とは、誰が付けた名前なのであろうか。そして、誰の祖先として祀ってあるのだろうか。石窟の構造や、装飾のモヨウなどから、いつの日か分かる時が来るかもしれない。これは専門の道の人にゆずるとして、いままで、多くの紙数を費やして記してきた責任上、私なりの考えをまとめてみたい。

別府の先祖神。これを文献の上から見ると、景行

西征においての、豊後での速津媛が第一にうかぶ。

だがそうではないとなると、天皇の側臣で、直入まで進んだ中臣氏と物部氏の祖が浮かんでくる

祭祀のほうから云えば文句なく中臣氏である。「聖」なるものに目をやれば、そのほうに目がゆく。

しかし支配者としての武力を考え、金工（とくにタタラなど）を支配した武人としては文句なく物部氏に軍配を上げざるを得ない。

そういう意味で私としては、物部氏の一族が、別府の支配者の祖神としての「鬼ノ石窟」古墳にまつられるに相応わしいのではないかと云いたい。

「鬼」と「鉄」と「聖地観」の題名にも、ピッタリとくるのではなからうか。

### 〔後記〕

何度も考え、書き直しても、悔やみが残る。

ランドル・コリンズの『脱常識の社会学―社会の読み方入門』のまえがきが、左の文からはじまる。

どんな学問も、つぎの二つのことを、めざさなければ

ならない。すなわち（第一に）明快であること、そして（第二に）当たり前でないこと、である。

真の知識は、他人に分るように言い表わすことが出来なければならぬ。しかも（第二に）何か言うに値すること、それを知れば、知る前とは違ってくるようなことが、そこに含まれていなければならない（あと略す）。

たしかに左様だと思った。読んですごいと思った。だが、然し悲しいかな。私などがそのつもりで論じても、自分ではそのつもりでいても、「ウのまねするカラス」にさえなっていないのではないかと自戒する。

コリンズの、第二のことどころか、第一のことさえもである。つらい。文を書くとは、つくづくムズカシイものだと、自分を鞭うっている。

御高教をお願いして、筆をおく。

以上

